

内村鑑三、その弟妹、そして私

和田 洋一

内村鑑三の永眠と、私の学生生活の終了とは、同じ時期である。学生時代の私の周囲には、内村鑑三を特に尊敬している者はいなかったし、教会の牧師さんからも、内村鑑三の著書をよむようにすすめられたことはなかった。私の父の蔵書の中にも、内村鑑三の著書は『宗教と文学』ただ一冊しかなかったように記憶する。そうした理由から、私は、クリスチャン学生でありながら、そして内村鑑三については色々話をきいていながら、彼の書いたものをよむ機会を、ほとんどもたなかった。直接、講演ないし説教をきく機会にはもちろんただの一度もめぐまれなかった。

小学校の生徒であったころ、私は京都府庁の南にある滋野校に六年間通ったが、自分の家と学校との丁度まん中ぐらいの距離のところに、岡田という表札のかかった家があった。下立売通り室町西入北側にあったその家は、今は取りはらわれて跡形もない。学校カバンを肩から下げた小学生の私が、この岡田家の門の中を、のぞくともしにのぞくと、玄関前の庭で、老人が片ひじを脱いで、弓のけい古をしている光景にとどききぶつかった。

この岡田老人は、内村鑑三の岳父に当る人であったが、当時の私は、もちろんそんなことを知っているはずもなかった。『回想の内

村鑑三』(鈴木俊郎編、岩波書店刊)に収められている落合太郎先生の「思い出すままに」という文章をよむと、落合先生が京大法科の学生であったころ、京大弓術部の岡田老師範から連絡があって、内村が東京からきているから遊びにこいということ、岡田邸にさっそく参上したということがかいてある。一九〇九年か一九一〇年のことらしく、従って私が小学校の一年生ぐらいのときのことである。

落合先生の記されているところによると、岡田老人は判事の職を退かれてから、弓道を楽しんでおられたらしく、同居していた息子つまり内村鑑三夫人の弟にあたる八雲という人も弓が上手であったらしい。

ところがこの八雲という人は、一九一一年四月になくなってしまった。そして年老いた両親と、若い夫人と、二人の幼い子供があとにのこった。それから何年かたった後、若い未亡人は二人の子供を岡田家にして再婚し、子供たちは、内村鑑三夫妻、つまり東京の叔父さん叔母さんのもとで養われることになり、京都の下立売の家をはなれた。一九一七年(大正六年)三月一三日附けで、内村鑑三が京都室町通り佐伯理一郎にあてた手紙の中には、「岡田の幼主

二、三日前當方に引取り世話致し居り候、是れ又一の大責任に有之候」とかかれています。

幼主というのは、長男の八郎君のことであるが、その姉さんの花枝さんのことには何にもふれられていない。内村全集に収められた手紙に目を通してみても、その年の九月一日附け夫人宛ての手紙の中に「八郎は遊びに忙はしく」という一句があるが、花枝といふ文字は見当らない。(日記の中の、姪第二号、が彼女を指していることを、最近鈴木俊郎氏から教わった)。この二人は、私と同じ日曜学校の生徒だったので、顔を知っていたし、弓を引いている老人の孫だということも、うすうす知っていた。私が小学校を卒業するとき、花枝さんは一年生から二年生に進級した。ひとときわ美しかった彼女は、優等生として一年生を代表して、校長先生の前に進み出たが、それから二年後、彼女とびちびちした弟の八郎君とは、京都から東京へ移ってしまったのである。ところがこの二人を生んだ母親が再婚した先は、私の日曜学校の校長さんであり、教会の長老さんであったため、東京へ去った二人の噂が、ときたま私の耳にはいることになった。岡田家を出て再婚したとはいっても、生みの親として、花枝さん、八郎君にはやはり会いたいと思つたが、内村鑑三が断乎として親子の面会を許さなかつたとか、二人の養育費にかんして内村鑑三がとても口やかましいとか、そういうたたくいの噂が間接のまた間接で私の耳に入った。

私が三高の生徒であつたころ、教会の青年会でテキストを決めて研究会をすることになり、牧師先生のすすめで、トーマス・アケムビスの『イミテーション・オブ・クライスト』を英語でよむこととなつた。この本の邦訳としては、内村達三郎のものがあり、立派な

訳だということであつたが、私は買求めるということをしなかつた。しかしその機会に、内村達三郎という人が、たいした学者であること、兄の鑑三とひどく仲が悪いことを知つた。

内村鑑三が永眠したその翌々年、知人の世話で私の結婚話が急にすんだ。相手の女性には、内村鑑三の姪だということだつた。鑑三には達三郎以外に弟がもう二人あつて、一番末の弟が関西学院中部の英語の教師をしていて、その次女とのあいだの話であつたが、四人の兄弟のうち、鑑三と達三郎とだけが不和といふのでなく、四人がそれぞれ大なり小なり仲たがいをしていることも、あとになつて段々分つてきた。

私の実父は、私の結婚話が進行する過程で、「内村鑑三の姪ならもう何も調べることはない」といつて、親類書を求めるといふようなことはしなかつた。いよいよ結婚式といふことになつても、内村系統の親戚からはお祝いの手紙も品もこなかつた。ささやかな披露宴がおわつたあと、新たに私の岳父となつた内村順也は、モーニングのスボンを軽くだたいで「これは鑑三の奴のですよ」と、にが笑いしながら私に語つた。これはずっと後で知つたことであるが、そのモーニングは鑑三が死んだとき、かたみ分けとして、実妹の木村宜(よし)にあたえられ、木村宜からさらに弟の順也におくられたものであつた。鑑三は三人の弟とは仲たがいがしていたが、たつたひとりの妹宜とのあいだは、うまくいつていたようで、そして宜はまた弟の順也とも仲よくつきあつていた。順也としては、宜が鑑三の家に出入りしていることが気にいらなかつたし、鑑三一家からいへば、宜が順也とつき合つてゐることは面白くなかつただろうし、宜は両方に気兼ねをしながら、両方とつき合つていたのである。順也

としては、兄鑑三にたいする、なが年にわたって蓄積された深刻な感情があり、鑑三のズボンをほいていることを意識したとたんに、その感情がむらむらと燃えかかったが、同時に鑑三のモーニングのズボン（上着やチョッキは、いやだといって受けとらなかつた）が娘の結婚式のさいに、ともかくも役立つたということ、そして内村鑑三の姪であるということ、娘の結婚話がすらすら運んだということが、にが笑いとなって、おそらくそのとき岳父の口もとにただよっていたのであろう。

私たちが結婚したその翌々年、一九三四年に内村達三郎が他界した。葬儀には弟の道治と妹の宜が参加し、鑑三の嗣子や未亡人、岳父などは参加しなかつた。岳父は兄達三郎とは、なごらく絶縁状態にあつたが、鑑三にたいするとは全く別の気持、恋しいたう気持、できれば和解したいという気持があつた。そして達三郎が病死する十日ばかり前、東京へ出かけたさいに、兄の家の前まで足をほんだ。しかし思い切つて門をたたこうとはせず、いく度かためらつたあと、空しく引きかえした。そのときより十二年前、達三郎が仙台に住んでいたころ、道治と岳父が訪問したとき「帰れ！帰れ！」と玄關払いをされたにがい思い出が、岳父をして思い切つて門をたたくことをさせなかつたのである。

それから十日して達三郎は病死した。臨終のさいに、「順也！順也！」と呼びつづけていたそうである。そのことは二十五年たつてから、達三郎の嗣子幸哉氏の口を通して直接岳父に伝えられた。東京在住の幸哉氏はそのことをどうしても伝えたいと思つて、一九五九年の一月、わざわざ京都の叔父（私の岳父）を訪ねたのである。

岳父が達三郎に玄關払いをされたというのは一九二〇年（大正九

年）二月のことである。仙台に住んでいた木村宜のつれあいの康託が死んで、すぐ上の兄の道治は小松島から、弟の順也は福島から、そしてさいごに長兄鑑三が東京からやってきた。ただもうひとりの兄達三郎だけは、仙台に住んでいながら姿をあらわさなかつたのであるが、そのとき岳父は達三郎を訪ねたのである。

岳父はアメリカで十四年のながい生活を送り、その年の一月、故国の土をふんだ。木村康託はそのときすでに病い重かつたが、義弟順也との再会を心から喜び、まもなくこの世を去つていったのである。未亡人となつた木村宜は、お葬式に鑑三が姿をあらわした機会に、絶交状態となつている道治や、順也とのあいだを何とか取りもとうとして努力した。しかし鑑三は、親父が道治や順也を勘当して死んだのだから、自分が二人と仲よくすることは親の遺志にそむくことになる、といつて妹のねがいをしりぞけた。岳父は道治とともに、鑑三と宜との会話を、ふすまをへだてて隣りの部屋できいていた。

鑑三たちの父宜之は、自分の息子である道治と順也にたいして、たしかに勘当書をかいた。岳父順也にたいする勘当書は木村康託があずかつていて、康託は岳父にたいして、これは見せない方がいいと思つたといつて見せなかつたそうである。道治にたいする勘当書は岳父の手にわたつていたが、これは鑑三の手にかえされた。岳父はこれらの勘当書が決して父の意志によつて書かれたものではなく、鑑三が父を強制してかかしたものであると堅く信じている。

鑑三は妹宜の申し出をこつたあと、岳父と顔を合わし、「やあ、しばらくだった」とその程度のあいさつはした。道治と順也はこの機会に達三郎とのあいだのより、を戻そうとして、その宅を訪問

したのであるが、文閲で「帰れ！帰れ！」とやられてしまった。それにしても鑑三は、二年半前に静子夫人に手紙を送り「永眠に就く前にすべての人の科（とが）を赦し、神の御赦しを乞ふこと最も必要に有之候」などとかいている。これは静子夫人が京都のお里岡田邸で老母の看病をしていたときに柏木から送った手紙であるが弟の科（とが）はどういうわけか赦せなかつたらしい。

道治は一九四三年（昭和一八年）に死去した。道治は、学歴は小学校を出ただけで、子供のときから妙にひねくれてしまつて、母親をなやませていた。「アメリカへでもいってこれればいい」と、母親は道治が消えてしまふのを望むようなことをよく言つていたという。二人の兄がすぐれた才能をもっているために、劣等感を感じたり、おれも鑑三や達三郎と血を分けた兄弟で、同じようにえらいんだという風な優越感にひたつたこともあつたらしく想像される。兄弟や妹たちのあいだを動きまわり、よけいなかげ口をきいてまわつて、不和対立を一層拡大したのではないかという疑いもないではない。子供はなく、奥さんは未亡人になつてまもなく養老院へはいられたが、その後の消息は誰ひとり知る者はない。今日なお存命であるとすれば、年令は八十才か八十一才のはずである。

木村宜はその翌々年他界した。その前年の夏、宜は栃木県の黒磯に子供や孫たちとともに疎開し、そこに岳父もまねかれ、ほんの二三日ながら、共同の時をすごした。長男鑑三、次男達三郎、三男道治と、順を追うて死んでいって、あとにのこつた妹宜と四男順也とが疎開先まで、久しぶりに親しく語りあつたのである。岳父だけでなく、岳母、そして当時東京に住んでいた私たち夫妻も招かれて黒磯でしばらくのときをすごしたが、食物は豊富であつたし、岳父

も木村未亡人もすつかり仕合わせそうだったし、孫たちはにぎやかに楽しく遊んでいたし、空気は澄み、山も森も川も美しく、黒磯滞在の数日は私にとって忘れがたいものであつた。

その翌年、終戦直後宜は死去し、さいごに末の弟がただひり生き残つて、私たち夫妻とともに現在京都で健康にくらしている。一九六一年一月一三日で岳父は満八十一才を迎えた。

内村の兄弟姉妹五人は、一九〇四年（明治三七年）母が死んだ機会に角筈に集まつたが、その後二十六年間、鑑三の永眠にいたるまで、五人はついに一堂に会することがなかつた。岩波書店の「内村鑑三年譜」には、母を雑司ヶ谷墓地に葬つたがそのさい、「達三郎ら弟たちより激しい反抗を受けた」と記されているが、葬式の前後のすさまじい状況は、同年一月一七日夜、鑑三が、札幌の宮部金吾あてにかいた手紙によつて、その一端を想像することができる。鑑三はその中で、「日本国在つて以來斯んな母の葬式は無かつたらふと思ひます。母の遺骨を雨中、一人で地に埋めた其の有様を想像して、下さい、然かも弟妹四人東京に居つたのであります、爾くして達三郎が彼等を皆な指揮して居つたのであります」とかいている。（傍点はい内村鑑三自身）また「達三郎は今度母を死に至らしめしは實に小生の罪であると言ひ張りて、病中も死後も一銭の寄附もなさず、一指の力をも貸さず、アマツサへ葬式の場にて小生が感慨を述べるときに小生に妨害と侮辱とを加へました」ともべている。

母を死に至らしめたのは鑑三の罪であつたかどうか、もとより私には分らない。ただ三人の弟と一人の妹が、鑑三の親不孝に対する怒り、ないし鑑三夫妻の母に対する仕打ちが、あたたかくなかつた

ことに對する強い不満という点で、一致していたことだけは確かなようである。

今引き合いに出した手紙の中で、鑑三は「餘りに愛せられざりし母」という表現をつかっている。母を愛していなかった人々の中に鑑三自身ははいっているのか、いないのか、それも分らないが、この母は生まれたときから片眼がみえず、死ぬすこし前にはもう一つの眼もみえなくなり、精神錯乱し、さいごは巢鴨の精神病院で悲惨なさいごをとげたのである。

両方の眼がみえなくなつてから、彼女は押入れのふすまをあげ、「鑑三が殺しに来る！」とわめきながら、ばたばたして押入れの中へはいろうとしたのを親戚の大戸という人がみたといひ、鑑三が毒をもつて自分を殺そうとしているからといひ、食物を口にしないかゝつたとか、聞くにたえないような噂も伝わっている。鑑三を弁護しようという立場からすれば、それは、すでに頭のおかしくなつてゐる母の耳に、弟たちがさまざまなかことを中傷したためだといふことでもあるだらう。

病氣の母がみじめな状態にあるのを、はつておけないといふことになつて、当時栃木県で学校の教師をしていた道治は家をたたんで下宿住まいをし、奥さんのサイさんが看病のため東京に向つた。そしてその看護の仕方は近所のほめものであったが、まもなく鑑三がサイさんの看護をことわり、一方静子夫人は看病に悲鳴をあげ、母親の病状は悪化して、さいごは巢鴨病院ということになつたものである。

岳父は当時、福島中学の英語の教師をしていて、東京の母のことを気にしていたが、道治夫人が看護のため、家をたたんで東京へ出

かけたといふことで、大いに感激し、かつ安堵したといふことである。いよいよ母がなくなつて、葬式に列席するために、岳父が上京したとき、鑑三は香奠を出せといつた。岳父は、母を見舞うため、度々上京したため、手もちの金が全くなく、そのため福島中学に頼んで借金をし、お金を東京へ送つてもらうようにしてきた、お金とどけばすぐ香奠を出すといつたところ、それなら出すといふ証文をかけたといつた。仕方なしに証文をかけたところ、その翌日にお金がとどいたので香奠を出した。達三郎は母の死後一銭の寄附もしなかつたといふが、或いはそうだったかも知れない、と岳父は語つてゐる。何れにしても、ちよつとやそつとの関係ではない。

お葬式のさい、鑑三が感慨を述べているときに、達三郎がどんな妨害をしたか、侮辱を加えたか、岳父はおぼえていない。ただ道治がすわつたまま、頭を何度も柱にぶつつけ、ぶつつけることによつて鑑三の感慨にたいする、無言の反抗、を示していたことだけが記憶にのこつてゐるようである。

葬式の翌朝、なきがらを火葬場で焼いて、そのあと、棺にうちつけた焼け釘を、達三郎、道治、宜、順也の四人が一本づつかたみに分け合つた。そして「この釘はおれたちがもつてゐるので、鑑三にはやらないんだ」と、達三郎がそのとき言つたといふ。雑司ヶ谷の墓地にはうむる段になると、三弟一妹は姿を見せず、鑑三ひとり雨の中を植木屋と車夫に助けられて葬らねばならぬことになつた。「非常にツラクありました」「實に悲しくありました」と、かいてゐるが、全くその通りだつたであらう。

その翌年のお正月には、鑑三に反抗する弟たちは、仙台の妹のつ

れ合い、木村康託の家に集まった。今まではお正月には、いつも本郷の真砂町の両親のもとに兄弟姉妹が集まる例になっていたのが、そういうことになってしまって、父宜之はおそらく断腸の思いであったらう。

宜之としては、収入のない身の上であり、長男鑑三と同居し、長男夫妻の世話になるのは一応当然ではあったが、そのため鑑三にたいしては、とかく遠慮がちになり、鑑三と弟たちとのはげしい争いを、ただはらはらして見ているか、鑑三の肩をもつか、どちらかという事になってしまった。達三郎、道治、順也からすれば、親父の態度をもの足りないとは思っていても、親父を憎いとは思っていなかったし、男やもめになった親父のさびしい境遇に同情する気持はもちろんあった。しかし鑑三憎さのあまり、鑑三にくっついていく親父に、冷たい仕打ちをするという結果になってしまったのである。

それから三年目に、宜之は角筈で死んだ。数え年七十六才。そのときは達三郎と岳父は日本にいながら、葬儀に列席していない。宜之はいつも長男鑑三をたてるようにし、岳父に対しては、いつも鑑三に「あやまれ、あやまれ」という調子だったので、岳父はそれが不満で、そんなことから鑑三の家から、従ってまた父のそばから、足が遠のいてしまったのである。

生前の内村鑑三を回想してかかれた文章の中には、彼が周囲の人々にしばしば誤解されたという文句が又しても出ている。誤解されたというのは、不当に悪く解されたということで、従ってそれは内村鑑三を弁護する意味で言われているのである。内村鑑三は多くの

敵をつくった、しかしそれはすべて誤解にもとづくものである、とそれらの人たちは言いたげである。

もちろん内村は誤解もされたであらう。しかし誤解だ誤解だといって、内村のもっていた人間の弱点をごまかすようなやり方には、私は反対である。彼は人一倍大きな弱点、人間的欠陥をもっていたように、私には思える。それでいいではないだろうか、それを認めたらとって、彼のすぐれた面、偉大な面、非凡な面を否定することにはすこしもならない。

内村鑑三全集の出版社から、内村鑑三についての回想を執筆することを求められた場合、多くの人は彼のすぐれた面を思い出してかくであらうし、そのことは自然でもあるし、何等非難にあたいたくない。しかし戦後、内村鑑三は、あまりにも理想化され、神々しい人格者、模範的クリスチャン、光り輝く反戦の英雄にされすぎてしまった。好意的にかかれた回想の類は、それはそれでよろしい。厳正な歴史的人間像は今後新たにつくりあげられねばならない。